

古代エジプト人の死生観の通説を疑う

－プタハモーセ断片－

小山雅人

2026年3月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

古代エジプト人の死生観の通説を疑う

－プタハモーセ断片－

小山雅人

1

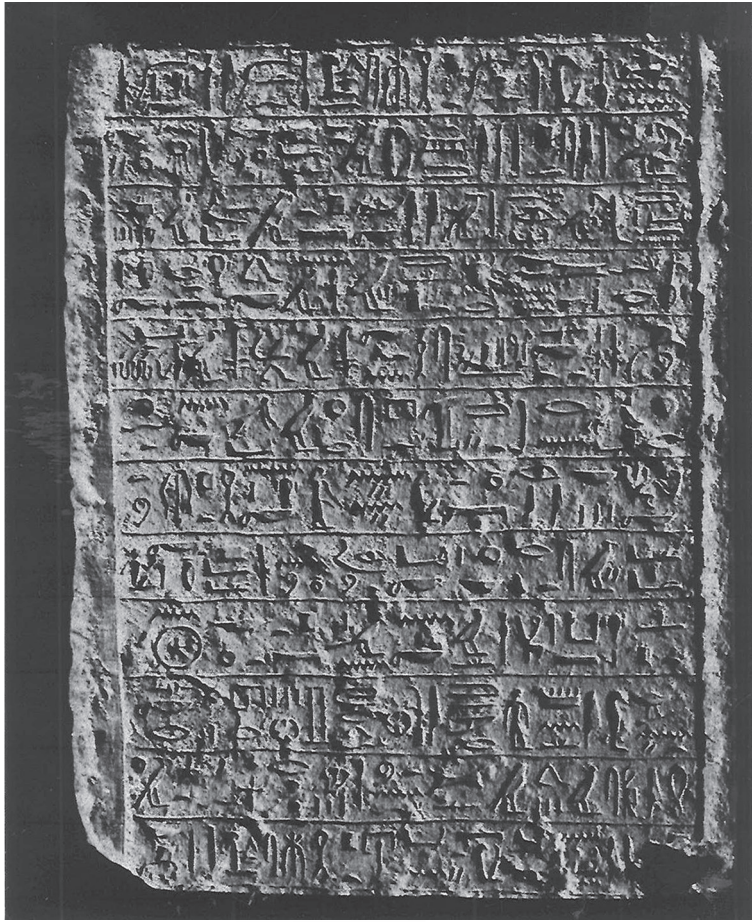
ここに紹介したいのは、モスクワ・プーシキン博物館所蔵のエジプト第19王朝初頭（セティ1世の治世か）のプタハモーセの碑の断片^(註1)です。石灰岩製で、銘文部分を残して上部は失われています。現存長は、縦59cm・横45cmです。出土地は、銘文11-12行目のソカル神の祭礼の記述からメンフィスと推定されています。

古代エジプト文化史における供養碑について、概要を述べると、初期王朝期の最初の形は、横長の長方形の板の中央部に故人の彼岸での食事を描くものであったようです。椅子に座る故人は手を伸ばすだけで、決して供物卓には触れないという決まりがあったようです。

第3～第4王朝になると、偽扉という形になり、その中央やや上に彼岸の食事の浮彫図が置かれます。戸柱と方立の4本の柱と、楣と冠木の2本の横木には銘文が刻まれるが、殆どが、供物を願う呪文（ヘテブ・ディ・ネスウト書式^{註2}）と故人の称号・役職と名前です。それで、この種の葬祭石碑は、情報は不十分ながら「墓碑銘」とも言えます。妻子が描かれることもあり、偽扉の扉部分に故人と同大に向かい合って彫られるのもまれにありますが、柱を何分割化して、本人と息子、妻と娘が描かれていたりします。

第6王朝末期から第一中間期になると、浮彫や銘文の構成にやや自由なレイアウトが見られますが、本質は変わりません。古王国時代供物卓の上にはスライスされたパンが立てて並ぶだけであったのが、他のパンや肉・鳥・野菜などが山積みになります。中王国にかけて、偽扉は少なくなり、第12王朝の中頃には扉とは言えないほど小さく（高さ60cm位）なって、消えてしまいます。

中王国の初期から偽扉の形をとらない石碑は、供養碑と呼ばれます。相変わらず供物を願う呪文（ヘテブ・ディ・ネスウト書式）と故人の称号・役職と名前ですが、碑文のトップに王の治世年が刻まれる石碑も現れます。この時代の作品が後世の古典となったように浮彫も文字も実に美しい。ヒエログリフの文字は勿論、一字一字彫っているのですが、まるでハンコか活字のように（粘土でないので無理な話）同じ字は同じ形に彫ってある。この時代



Text:

(1) //...// (2) 𐀀𐀁𐀂𐀃𐀄𐀅𐀆𐀇𐀈𐀉𐀊𐀋𐀌𐀍𐀎𐀏𐀐𐀑𐀒𐀓𐀔𐀕𐀖𐀗𐀘𐀙𐀚𐀛𐀜𐀝𐀞𐀟𐀠𐀡𐀢𐀣𐀤𐀥𐀦𐀧𐀨𐀩𐀪𐀫𐀬𐀭𐀮𐀯𐀰𐀱𐀲𐀳𐀴𐀵𐀶𐀷𐀸𐀹𐀺𐀻𐀼𐀽𐀾𐀿𐁀𐁁𐁂𐁃𐁄𐁅𐁆𐁇𐁈𐁉𐁊𐁋𐁌𐁍𐁎𐁏𐁐𐁑𐁒𐁓𐁔𐁕𐁖𐁗𐁘𐁙𐁚𐁛𐁜𐁝𐁞𐁟𐁠𐁡𐁢𐁣𐁤𐁥𐁦𐁧𐁨𐁩𐁪𐁫𐁬𐁭𐁮𐁯𐁰𐁱𐁲𐁳𐁴𐁵𐁶𐁷𐁸𐁹𐁺𐁻𐁼𐁽𐁾𐁿𐂀𐂁𐂂𐂃𐂄𐂅𐂆𐂇𐂈𐂉𐂊𐂋𐂌𐂍𐂎𐂏𐂐𐂑𐂒𐂓𐂔𐂕𐂖𐂗𐂘𐂙𐂚𐂛𐂜𐂝𐂞𐂟𐂠𐂡𐂢𐂣𐂤𐂥𐂦𐂧𐂨𐂩𐂪𐂫𐂬𐂭𐂮𐂯𐂰𐂱𐂲𐂳𐂴𐂵𐂶𐂷𐂸𐂹𐂺𐂻𐂼𐂽𐂾𐂿𐃀𐃁𐃂𐃃𐃄𐃅𐃆𐃇𐃈𐃉𐃊𐃋𐃌𐃍𐃎𐃏𐃐𐃑𐃒𐃓𐃔𐃕𐃖𐃗𐃘𐃙𐃚𐃛𐃜𐃝𐃞𐃟𐃠𐃡𐃢𐃣𐃤𐃥𐃦𐃧𐃨𐃩𐃪𐃫𐃬𐃭𐃮𐃯𐃰𐃱𐃲𐃳𐃴𐃵𐃶𐃷𐃸𐃹𐃺𐃻𐃼𐃽𐃾𐃿𐄀𐄁𐄂𐄃𐄄𐄅𐄆𐄇𐄈𐄉𐄊𐄋𐄌𐄍𐄎𐄏𐄐𐄑𐄒𐄓𐄔𐄕𐄖𐄗𐄘𐄙𐄚𐄛𐄜𐄝𐄞𐄟𐄠𐄡𐄢𐄣𐄤𐄥𐄦𐄧𐄨𐄩𐄪𐄫𐄬𐄭𐄮𐄯𐄰𐄱𐄲𐄳𐄴𐄵𐄶𐄷𐄸𐄹𐄺𐄻𐄼𐄽𐄾𐄿𐅀𐅁𐅂𐅃𐅄𐅅𐅆𐅇𐅈𐅉𐅊𐅋𐅌𐅍𐅎𐅏𐅐𐅑𐅒𐅓𐅔𐅕𐅖𐅗𐅘𐅙𐅚𐅛𐅜𐅝𐅞𐅟𐅠𐅡𐅢𐅣𐅤𐅥𐅦𐅧𐅨𐅩𐅪𐅫𐅬𐅭𐅮𐅯𐅰𐅱𐅲𐅳𐅴𐅵𐅶𐅷𐅸𐅹𐅺𐅻𐅼𐅽𐅾𐅿𐆀𐆁𐆂𐆃𐆄𐆅𐆆𐆇𐆈𐆉𐆊𐆋𐆌𐆍𐆎𐆏𐆐𐆑𐆒𐆓𐆔𐆕𐆖𐆗𐆘𐆙𐆚𐆛𐆜𐆝𐆞𐆟𐆠𐆡𐆢𐆣𐆤𐆥𐆦𐆧𐆨𐆩𐆪𐆫𐆬𐆭𐆮𐆯𐆰𐆱𐆲𐆳𐆴𐆵𐆶𐆷𐆸𐆹𐆺𐆻𐆼𐆽𐆾𐆿𐇀𐇁𐇂𐇃𐇄𐇅𐇆𐇇𐇈𐇉𐇊𐇋𐇌𐇍𐇎𐇏𐇐𐇑𐇒𐇓𐇔𐇕𐇖𐇗𐇘𐇙𐇚𐇛𐇜𐇝𐇞𐇟𐇠𐇡𐇢𐇣𐇤𐇥𐇦𐇧𐇨𐇩𐇪𐇫𐇬𐇭𐇮𐇯𐇰𐇱𐇲𐇳𐇴𐇵𐇶𐇷𐇸𐇹𐇺𐇻𐇼𐇽𐇾𐇿𐈀𐈁𐈂𐈃𐈄𐈅𐈆𐈇𐈈𐈉𐈊𐈋𐈌𐈍𐈎𐈏𐈐𐈑𐈒𐈓𐈔𐈕𐈖𐈗𐈘𐈙𐈚𐈛𐈜𐈝𐈞𐈟𐈠𐈡𐈢𐈣𐈤𐈥𐈦𐈧𐈨𐈩𐈪𐈫𐈬𐈭𐈮𐈯𐈰𐈱𐈲𐈳𐈴𐈵𐈶𐈷𐈸𐈹𐈺𐈻𐈼𐈽𐈾𐈿𐉀𐉁𐉂𐉃𐉄𐉅𐉆𐉇𐉈𐉉𐉊𐉋𐉌𐉍𐉎𐉏𐉐𐉑𐉒𐉓𐉔𐉕𐉖𐉗𐉘𐉙𐉚𐉛𐉜𐉝𐉞𐉟𐉠𐉡𐉢𐉣𐉤𐉥𐉦𐉧𐉨𐉩𐉪𐉫𐉬𐉭𐉮𐉯𐉰𐉱𐉲𐉳𐉴𐉵𐉶𐉷𐉸𐉹𐉺𐉻𐉼𐉽𐉾𐉿𐊀𐊁𐊂𐊃𐊄𐊅𐊆𐊇𐊈𐊉𐊊𐊋𐊌𐊍𐊎𐊏𐊐𐊑𐊒𐊓𐊔𐊕𐊖𐊗𐊘𐊙𐊚𐊛𐊜𐊝𐊞𐊟𐊠𐊡𐊢𐊣𐊤𐊥𐊦𐊧𐊨𐊩𐊪𐊫𐊬𐊭𐊮𐊯𐊰𐊱𐊲𐊳𐊴𐊵𐊶𐊷𐊸𐊹𐊺𐊻𐊼𐊽𐊾𐊿𐋀𐋁𐋂𐋃𐋄𐋅𐋆𐋇𐋈𐋉𐋊𐋋𐋌𐋍𐋎𐋏𐋐𐋑𐋒𐋓𐋔𐋕𐋖𐋗𐋘𐋙𐋚𐋛𐋜𐋝𐋞𐋟𐋠𐋡𐋢𐋣𐋤𐋥𐋦𐋧𐋨𐋩𐋪𐋫𐋬𐋭𐋮𐋯𐋰𐋱𐋲𐋳𐋴𐋵𐋶𐋷𐋸𐋹𐋺𐋻𐋼𐋽𐋾𐋿𐌀𐌁𐌂𐌃𐌄𐌅𐌆𐌇𐌈𐌉𐌊𐌋𐌌𐌍𐌎𐌏𐌐𐌑𐌒𐌓𐌔𐌕𐌖𐌗𐌘𐌙𐌚𐌛𐌜𐌝𐌞𐌟𐌠𐌡𐌢𐌣𐌤𐌥𐌦𐌧𐌨𐌩𐌪𐌫𐌬𐌭𐌮𐌯𐌰𐌱𐌲𐌳𐌴𐌵𐌶𐌷𐌸𐌹𐌺𐌻𐌼𐌽𐌾𐌿𐍀𐍁𐍂𐍃𐍄𐍅𐍆𐍇𐍈𐍉𐍊𐍋𐍌𐍍𐍎𐍏𐍐𐍑𐍒𐍓𐍔𐍕𐍖𐍗𐍘𐍙𐍚𐍛𐍜𐍝𐍞𐍟𐍠𐍡𐍢𐍣𐍤𐍥𐍦𐍧𐍨𐍩𐍪𐍫𐍬𐍭𐍮𐍯𐍰𐍱𐍲𐍳𐍴𐍵𐍶𐍷𐍸𐍹𐍺𐍻𐍼𐍽𐍾𐍿𐎀𐎁𐎂𐎃𐎄𐎅𐎆𐎇𐎈𐎉𐎊𐎋𐎌𐎍𐎎𐎏𐎐𐎑𐎒𐎓𐎔𐎕𐎖𐎗𐎘𐎙𐎚𐎛𐎜𐎝𐎞𐎟𐎠𐎡𐎢𐎣𐎤𐎥𐎦𐎧𐎨𐎩𐎪𐎫𐎬𐎭𐎮𐎯𐎰𐎱𐎲𐎳𐎴𐎵𐎶𐎷𐎸𐎹𐎺𐎻𐎼𐎽𐎾𐎿𐏀𐏁𐏂𐏃𐏄𐏅𐏆𐏇𐏈𐏉𐏊𐏋𐏌𐏍𐏎𐏏𐏐𐏑𐏒𐏓𐏔𐏕𐏖𐏗𐏘𐏙𐏚𐏛𐏜𐏝𐏞𐏟𐏠𐏡𐏢𐏣𐏤𐏥𐏦𐏧𐏨𐏩𐏪𐏫𐏬𐏭𐏮𐏯𐏰𐏱𐏲𐏳𐏴𐏵𐏶𐏷𐏸𐏹𐏺𐏻𐏼𐏽𐏾𐏿𐐀𐐁𐐂𐐃𐐄𐐅𐐆𐐇𐐈𐐉𐐊𐐋𐐌𐐍𐐎𐐏𐐐𐐑𐐒𐐓𐐔𐐕𐐖𐐗𐐘𐐙𐐚𐐛𐐜𐐝𐐞𐐟𐐠𐐡𐐢𐐣𐐤𐐥𐐦𐐧𐐨𐐩𐐪𐐫𐐬𐐭𐐮𐐯𐐰𐐱𐐲𐐳𐐴𐐵𐐶𐐷𐐸𐐹𐐺𐐻𐐼𐐽𐐾𐐿𐑀𐑁𐑂𐑃𐑄𐑅𐑆𐑇𐑈𐑉𐑊𐑋𐑌𐑍𐑎𐑏𐑐𐑑𐑒𐑓𐑔𐑕𐑖𐑗𐑘𐑙𐑚𐑛𐑜𐑝𐑞𐑟𐑠𐑡𐑢𐑣𐑤𐑥𐑦𐑧𐑨𐑩𐑪𐑫𐑬𐑭𐑮𐑯𐑰𐑱𐑲𐑳𐑴𐑵𐑶𐑷𐑸𐑹𐑺𐑻𐑼𐑽𐑾𐑿𐒀𐒁𐒂𐒃𐒄𐒅𐒆𐒇𐒈𐒉𐒊𐒋𐒌𐒍𐒎𐒏𐒐𐒑𐒒𐒓𐒔𐒕𐒖𐒗𐒘𐒙𐒚𐒛𐒜𐒝𐒞𐒟𐒠𐒡𐒢𐒣𐒤𐒥𐒦𐒧𐒨𐒩𐒪𐒫𐒬𐒭𐒮𐒯𐒰𐒱𐒲𐒳𐒴𐒵𐒶𐒷𐒸𐒹𐒺𐒻𐒼𐒽𐒾𐒿𐓀𐓁𐓂𐓃𐓄𐓅𐓆𐓇𐓈𐓉𐓊𐓋𐓌𐓍𐓎𐓏𐓐𐓑𐓒𐓓𐓔𐓕𐓖𐓗𐓘𐓙𐓚𐓛𐓜𐓝𐓞𐓟𐓠𐓡𐓢𐓣𐓤𐓥𐓦𐓧𐓨𐓩𐓪𐓫𐓬𐓭𐓮𐓯𐓰𐓱𐓲𐓳𐓴𐓵𐓶𐓷𐓸𐓹𐓺𐓻𐓼𐓽𐓾𐓿𐔀𐔁𐔂𐔃𐔄𐔅𐔆𐔇𐔈𐔉𐔊𐔋𐔌𐔍𐔎𐔏𐔐𐔑𐔒𐔓𐔔𐔕𐔖𐔗𐔘𐔙𐔚𐔛𐔜𐔝𐔞𐔟𐔠𐔡𐔢𐔣𐔤𐔥𐔦𐔧𐔨𐔩𐔪𐔫𐔬𐔭𐔮𐔯𐔰𐔱𐔲𐔳𐔴𐔵𐔶𐔷𐔸𐔹𐔺𐔻𐔼𐔽𐔾𐔿𐕀𐕁𐕂𐕃𐕄𐕅𐕆𐕇𐕈𐕉𐕊𐕋𐕌𐕍𐕎𐕏𐕐𐕑𐕒𐕓𐕔𐕕𐕖𐕗𐕘𐕙𐕚𐕛𐕜𐕝𐕞𐕟𐕠𐕡𐕢𐕣𐕤𐕥𐕦𐕧𐕨𐕩𐕪𐕫𐕬𐕭𐕮𐕯𐕰𐕱𐕲𐕳𐕴𐕵𐕶𐕷𐕸𐕹𐕺𐕻𐕼𐕽𐕾𐕿𐖀𐖁𐖂𐖃𐖄𐖅𐖆𐖇𐖈𐖉𐖊𐖋𐖌𐖍𐖎𐖏𐖐𐖑𐖒𐖓𐖔𐖕𐖖𐖗𐖘𐖙𐖚𐖛𐖜𐖝𐖞𐖟𐖠𐖡𐖢𐖣𐖤𐖥𐖦𐖧𐖨𐖩𐖪𐖫𐖬𐖭𐖮𐖯𐖰𐖱𐖲𐖳𐖴𐖵𐖶𐖷𐖸𐖹𐖺𐖻𐖼𐖽𐖾𐖿𐗀𐗁𐗂𐗃𐗄𐗅𐗆𐗇𐗈𐗉𐗊𐗋𐗌𐗍𐗎𐗏𐗐𐗑𐗒𐗓𐗔𐗕𐗖𐗗𐗘𐗙𐗚𐗛𐗜𐗝𐗞𐗟𐗠𐗡𐗢𐗣𐗤𐗥𐗦𐗧𐗨𐗩𐗪𐗫𐗬𐗭𐗮𐗯𐗰𐗱𐗲𐗳𐗴𐗵𐗶𐗷𐗸𐗹𐗺𐗻𐗼𐗽𐗾𐗿𐘀𐘁𐘂𐘃𐘄𐘅𐘆𐘇𐘈𐘉𐘊𐘋𐘌𐘍𐘎𐘏𐘐𐘑𐘒𐘓𐘔𐘕𐘖𐘗𐘘𐘙𐘚𐘛𐘜𐘝𐘞𐘟𐘠𐘡𐘢𐘣𐘤𐘥𐘦𐘧𐘨𐘩𐘪𐘫𐘬𐘭𐘮𐘯𐘰𐘱𐘲𐘳𐘴𐘵𐘶𐘷𐘸𐘹𐘺𐘻𐘼𐘽𐘾𐘿𐙀𐙁𐙂𐙃𐙄𐙅𐙆𐙇𐙈𐙉𐙊𐙋𐙌𐙍𐙎𐙏𐙐𐙑𐙒𐙓𐙔𐙕𐙖𐙗𐙘𐙙𐙚𐙛𐙜𐙝𐙞𐙟𐙠𐙡𐙢𐙣𐙤𐙥𐙦𐙧𐙨𐙩𐙪𐙫𐙬𐙭𐙮𐙯𐙰𐙱𐙲𐙳𐙴𐙵𐙶𐙷𐙸𐙹𐙺𐙻𐙼𐙽𐙾𐙿𐚀𐚁𐚂𐚃𐚄𐚅𐚆𐚇𐚈𐚉𐚊𐚋𐚌𐚍𐚎𐚏𐚐𐚑𐚒𐚓𐚔𐚕𐚖𐚗𐚘𐚙𐚚𐚛𐚜𐚝𐚞𐚟𐚠𐚡𐚢𐚣𐚤𐚥𐚦𐚧𐚨𐚩𐚪𐚫𐚬𐚭𐚮𐚯𐚰𐚱𐚲𐚳𐚴𐚵𐚶𐚷𐚸𐚹𐚺𐚻𐚼𐚽𐚾𐚿𐛀𐛁𐛂𐛃𐛄𐛅𐛆𐛇𐛈𐛉𐛊𐛋𐛌𐛍𐛎𐛏𐛐𐛑𐛒𐛓𐛔𐛕𐛖𐛗𐛘𐛙𐛚𐛛𐛜𐛝𐛞𐛟𐛠𐛡𐛢𐛣𐛤𐛥𐛦𐛧𐛨𐛩𐛪𐛫𐛬𐛭𐛮𐛯𐛰𐛱𐛲𐛳𐛴𐛵𐛶𐛷𐛸𐛹𐛺𐛻𐛼𐛽𐛾𐛿𐜀𐜁𐜂𐜃𐜄𐜅𐜆𐜇𐜈𐜉𐜊𐜋𐜌𐜍𐜎𐜏𐜐𐜑𐜒𐜓𐜔𐜕𐜖𐜗𐜘𐜙𐜚𐜛𐜜𐜝𐜞𐜟𐜠𐜡𐜢𐜣𐜤𐜥𐜦𐜧𐜨𐜩𐜪𐜫𐜬𐜭𐜮𐜯𐜰𐜱𐜲𐜳𐜴𐜵𐜶𐜷𐜸𐜹𐜺𐜻𐜼𐜽𐜾𐜿𐝀𐝁𐝂𐝃𐝄𐝅𐝆𐝇𐝈𐝉𐝊𐝋𐝌𐝍𐝎𐝏𐝐𐝑𐝒𐝓𐝔𐝕𐝖𐝗𐝘𐝙𐝚𐝛𐝜𐝝𐝞𐝟𐝠𐝡𐝢𐝣𐝤𐝥𐝦𐝧𐝨𐝩𐝪𐝫𐝬𐝭𐝮𐝯𐝰𐝱𐝲𐝳𐝴𐝵𐝶𐝷𐝸𐝹𐝺𐝻𐝼𐝽𐝾𐝿𐞀𐞁𐞂𐞃𐞄𐞅𐞆𐞇𐞈𐞉𐞊𐞋𐞌𐞍𐞎𐞏𐞐𐞑𐞒𐞓𐞔𐞕𐞖𐞗𐞘𐞙𐞚𐞛𐞜𐞝𐞞𐞟𐞠𐞡𐞢𐞣𐞤𐞥𐞦𐞧𐞨𐞩𐞪𐞫𐞬𐞭𐞮𐞯𐞰𐞱𐞲𐞳𐞴𐞵𐞶𐞷𐞸𐞹𐞺𐞻𐞼𐞽𐞾𐞿𐟀𐟁𐟂𐟃𐟄𐟅𐟆𐟇𐟈𐟉𐟊𐟋𐟌𐟍𐟎𐟏𐟐𐟑𐟒𐟓𐟔𐟕𐟖𐟗𐟘𐟙𐟚𐟛𐟜𐟝𐟞𐟟𐟠𐟡𐟢𐟣𐟤𐟥𐟦𐟧𐟨𐟩𐟪𐟫𐟬𐟭𐟮𐟯𐟰𐟱𐟲𐟳𐟴𐟵𐟶𐟷𐟸𐟹𐟺𐟻𐟼𐟽𐟾𐟿𐠀𐠁𐠂𐠃𐠄𐠅𐠆𐠇𐠈𐠉𐠊𐠋𐠌𐠍𐠎𐠏𐠐𐠑𐠒𐠓𐠔𐠕𐠖𐠗𐠘𐠙𐠚𐠛𐠜𐠝𐠞𐠟𐠠𐠡𐠢𐠣𐠤𐠥𐠦𐠧𐠨𐠩𐠪𐠫𐠬𐠭𐠮𐠯𐠰𐠱𐠲𐠳𐠴𐠵𐠶𐠷𐠸𐠹𐠺𐠻𐠼𐠽𐠾𐠿𐡀𐡁𐡂𐡃𐡄𐡅𐡆𐡇𐡈𐡉𐡊𐡋𐡌𐡍𐡎𐡏𐡐𐡑𐡒𐡓𐡔𐡕𐡖𐡗𐡘𐡙𐡚𐡛𐡜𐡝𐡞𐡟𐡠𐡡𐡢𐡣𐡤𐡥𐡦𐡧𐡨𐡩𐡪𐡫𐡬𐡭𐡮𐡯𐡰𐡱𐡲𐡳𐡴𐡵𐡶𐡷𐡸𐡹𐡺𐡻𐡼𐡽𐡾𐡿𐢀𐢁𐢂𐢃𐢄𐢅𐢆𐢇𐢈𐢉𐢊𐢋𐢌𐢍𐢎𐢏𐢐𐢑𐢒𐢓𐢔𐢕𐢖𐢗𐢘𐢙𐢚𐢛𐢜𐢝𐢞𐢟𐢠𐢡𐢢𐢣𐢤𐢥𐢦𐢧𐢨𐢩𐢪𐢫𐢬𐢭𐢮𐢯𐢰𐢱𐢲𐢳𐢴𐢵𐢶𐢷𐢸𐢹𐢺𐢻𐢼𐢽𐢾𐢿𐣀𐣁𐣂𐣃𐣄𐣅𐣆𐣇𐣈𐣉𐣊𐣋𐣌𐣍𐣎𐣏𐣐𐣑𐣒𐣓𐣔𐣕𐣖𐣗𐣘𐣙𐣚𐣛𐣜𐣝𐣞𐣟𐣠𐣡𐣢𐣣𐣤𐣥𐣦𐣧𐣨𐣩𐣪𐣫𐣬𐣭𐣮𐣯𐣰𐣱𐣲𐣳𐣴𐣵𐣶𐣷𐣸𐣹𐣺𐣻𐣼𐣽𐣾𐣿𐤀𐤁𐤂𐤃𐤄𐤅𐤆𐤇𐤈𐤉𐤊𐤋𐤌𐤍𐤎𐤏𐤐𐤑𐤒𐤓𐤔𐤕𐤖𐤗𐤘𐤙𐤚𐤛𐤜𐤝𐤞𐤟𐤠𐤡𐤢𐤣𐤤𐤥𐤦𐤧𐤨𐤩𐤪𐤫𐤬𐤭𐤮𐤯𐤰𐤱𐤲𐤳𐤴𐤵𐤶𐤷𐤸𐤹𐤺𐤻𐤼𐤽𐤾𐤿𐥀𐥁𐥂𐥃𐥄𐥅𐥆𐥇𐥈𐥉𐥊𐥋𐥌𐥍𐥎𐥏𐥐𐥑𐥒𐥓𐥔𐥕𐥖𐥗𐥘𐥙𐥚𐥛𐥜𐥝𐥞𐥟𐥠𐥡𐥢𐥣𐥤𐥥𐥦𐥧𐥨𐥩𐥪𐥫𐥬𐥭𐥮𐥯𐥰𐥱𐥲𐥳𐥴𐥵𐥶𐥷𐥸𐥹𐥺𐥻𐥼𐥽𐥾𐥿𐦀𐦁𐦂𐦃𐦄𐦅𐦆𐦇𐦈𐦉𐦊𐦋𐦌𐦍𐦎𐦏𐦐𐦑𐦒𐦓𐦔𐦕𐦖𐦗𐦘𐦙𐦚𐦛𐦜𐦝𐦞𐦟𐦠𐦡𐦢𐦣𐦤𐦥𐦦𐦧𐦨𐦩𐦪𐦫𐦬𐦭𐦮𐦯𐦰𐦱𐦲𐦳𐦴𐦵𐦶𐦷𐦸𐦹𐦺𐦻𐦼𐦽𐦾𐦿𐧀𐧁𐧂𐧃𐧄𐧅𐧆𐧇𐧈𐧉𐧊𐧋𐧌𐧍𐧎𐧏𐧐𐧑𐧒𐧓𐧔𐧕𐧖𐧗𐧘𐧙𐧚𐧛𐧜𐧝𐧞𐧟𐧠𐧡𐧢𐧣𐧤𐧥𐧦𐧧𐧨𐧩𐧪𐧫𐧬𐧭𐧮𐧯𐧰𐧱𐧲𐧳𐧴𐧵𐧶𐧷𐧸𐧹𐧺𐧻𐧼𐧽𐧾𐧿𐨀𐨁𐨂𐨃𐨄𐨅𐨆𐨇𐨈𐨉𐨊𐨋𐨌𐨍𐨎𐨏𐨐𐨑𐨒𐨓𐨔𐨕𐨖𐨗𐨘𐨙𐨚𐨛𐨜𐨝𐨞𐨟𐨠𐨡𐨢𐨣𐨤𐨥𐨦𐨧𐨨𐨩𐨪𐨫𐨬𐨭𐨮𐨯𐨰𐨱𐨲𐨳𐨴𐨵𐨶𐨷𐨹𐨺𐨸𐨻𐨼𐨽𐨾𐨿𐩀𐩁𐩂𐩃𐩄𐩅𐩆𐩇𐩈𐩉𐩊𐩋𐩌𐩍𐩎𐩏𐩐𐩑𐩒𐩓𐩔𐩕𐩖𐩗𐩘𐩙𐩚𐩛𐩜𐩝𐩞𐩟𐩠𐩡𐩢𐩣𐩤𐩥𐩦𐩧𐩨𐩩𐩪𐩫𐩬𐩭𐩮𐩯𐩰𐩱𐩲𐩳𐩴𐩵𐩶𐩷𐩸𐩹𐩺𐩻𐩼𐩽𐩾𐩿𐪀𐪁𐪂𐪃𐪄𐪅𐪆𐪇𐪈𐪉𐪊𐪋𐪌𐪍𐪎𐪏𐪐𐪑𐪒𐪓𐪔𐪕𐪖𐪗𐪘𐪙𐪚𐪛𐪜𐪝𐪞𐪟𐪠𐪡𐪢𐪣𐪤𐪥𐪦𐪧𐪨𐪩𐪪𐪫𐪬𐪭𐪮𐪯𐪰𐪱𐪲𐪳𐪴𐪵𐪶𐪷𐪸𐪹𐪺𐪻𐪼𐪽𐪾𐪿𐫀𐫁𐫂𐫃𐫄𐫅𐫆𐫇𐫈𐫉𐫊𐫋𐫌𐫍𐫎𐫏𐫐𐫑𐫒𐫓𐫔𐫕𐫖𐫗𐫘𐫙𐫚𐫛𐫜𐫝𐫞𐫟𐫠𐫡𐫢𐫣𐫤𐫦𐫥𐫧𐫨𐫩𐫪𐫫𐫬𐫭𐫮𐫯𐫰𐫱𐫲𐫳𐫴𐫵𐫶𐫷𐫸𐫹𐫺𐫻𐫼𐫽𐫾𐫿𐬀𐬁𐬂𐬃𐬄𐬅𐬆𐬇𐬈𐬉𐬊𐬋𐬌𐬍𐬎𐬏𐬐𐬑𐬒𐬓𐬔𐬕𐬖𐬗𐬘𐬙𐬚𐬛𐬜𐬝𐬞𐬟𐬠𐬡𐬢𐬣𐬤𐬥𐬦𐬧𐬨𐬩𐬪𐬫𐬬𐬭𐬮𐬯𐬰𐬱𐬲𐬳𐬴𐬵𐬶𐬷𐬸𐬹𐬺𐬻𐬼𐬽𐬾𐬿𐭀𐭁𐭂𐭃𐭄𐭅𐭆𐭇𐭈𐭉𐭊𐭋𐭌𐭍𐭎𐭏𐭐𐭑𐭒𐭓𐭔𐭕𐭖𐭗𐭘𐭙𐭚𐭛𐭜𐭝𐭞𐭟𐭠𐭡𐭢𐭣𐭤𐭥𐭦𐭧𐭨𐭩𐭪𐭫𐭬𐭭𐭮𐭯𐭰𐭱𐭲𐭳𐭴𐭵𐭶𐭷𐭸𐭹𐭺𐭻𐭼𐭽𐭾𐭿𐮀𐮁𐮂𐮃𐮄𐮅𐮆𐮇𐮈𐮉𐮊𐮋𐮌𐮍𐮎𐮏𐮐𐮑𐮒𐮓𐮔𐮕𐮖𐮗𐮘𐮙𐮚𐮛𐮜𐮝𐮞𐮟𐮠𐮡𐮢𐮣𐮤𐮥𐮦𐮧𐮨𐮩𐮪𐮫𐮬𐮭𐮮𐮯𐮰𐮱𐮲𐮳𐮴𐮵𐮶𐮷𐮸𐮹𐮺𐮻𐮼𐮽𐮾𐮿𐯀𐯁𐯂𐯃𐯄𐯅𐯆𐯇𐯈𐯉𐯊𐯋𐯌𐯍𐯎𐯏𐯐𐯑𐯒𐯓𐯔𐯕𐯖𐯗𐯘𐯙𐯚𐯛𐯜𐯝𐯞𐯟𐯠

以降、葬祭・埋葬・供養の神はほとんどオシーリスだけになり、アビュドス巡礼のエピソードなども、定型化されて、供養碑に刻まれるようになります。浮彫の絵も左側に妻と並んで椅子に座る故人の前に供物満載の供物卓が置かれ、右手には長男を先頭とする家族が並ぶのが普通になります。

新王国の前半、第18王朝の中頃、葬祭石碑の歴史に革命的なことが起きます。王以外の者が神に直接参拝し、供物などの祈願を行うという供養碑が出現するのです。それまでは、石碑の上段で神と対面するのは王だけで、石碑の制作者は、石碑の最下段で、妻とともに（手を合わせているだけ、と言うのは日本語的表現で、実際は）両手の手のひらを相手に向けています。その新しい風潮の早い例として、トトモーセ3世の晩年ごろ、王の軍隊の「軍旗持ち」のマイエンヘカウ（支配者たちのライオンの意）は、石碑の最上段で左側に座るオシーリス神に参拝し、右側に座るプタハ神には息子（彼の軍隊を救う者という名前）を伴って参拝しているのです。その祈願の内容は、彼の千年前から変わらぬ「ヘテブ・ディ・ネ ストゥ書式」（供物下さい！）です。

同じ第18王朝の中頃から、太陽神レーへの讃歌を刻んだ大きな石碑を捧げて跪く姿の「石碑持ち像」も現れます。レーがアムーン神と合体したカルナックのアメン・レー神への讃歌の石碑を持つ像もあり、読んでみるとアケナテンのアテン讃歌によく似ています。共に太陽神ですから、当然です。このように讃歌であれ、供物の要求であれ、王以外の人間が、神に直接話せるという風潮が第19～20王朝（ラメセス朝）に蔓延します。

本稿の主題のプタハモーセの碑もこの時代の産物で、冒頭アムーン、オシーリス、アトーム・ハラクティに挨拶するが、後は専らアトーム・ハラクティという太陽神に直接語りかける。

この様な風潮の中でアケナテンが始めたアテン信仰の趣旨は「アテンを知るのは王である朕、だから国民よ、朕を崇拜せよ」というのですから、時代にまさに逆行していました。通史などでよく「アマルナ革命」と呼ばれましたが、今や「偽預言者」とさえ呼ばれるアケナテンの新宗教は「アマルナの反革命」だったのです。

2

さて、冒頭に紹介したプタハモーセの石碑は、「神と話せる時代」に自分の思うことを正直に神に話していると実感できる讃歌であり、それに続く感情の吐露と評価できる資料と信じて、以下に内容を和訳で紹介したい。（1）～（13）は原文の行頭を示しますが、語順が全く違うので厳密ではありません。

(1) [・・・・アムーンに賛美を捧げまつる]

筆者は神名・人名などは出来るだけ原音に近い表記^(註5)をすべきと考える者です。この神名は古代エジプト語の後裔コプト語に拠る。

(2) 永遠の支配者ウネネフェルよ、声正しきプタハモーセが申します。

ウネネフェル(オシーリスの別名)は根拠がないので、便宜的な読み方。人名の○○メスは、ギリシア語の○○モーシスですから、この下エジプトなまり(エガイになる)のギリシア語から、問題なく○○モーセと復原できます。トトモーセもアハモーセも同じ要領です。

あなたに挨拶、(3)あなたは輝いて効果抜群、アトゥム・ハラクティよ。

アトゥム神は神々の父と呼ばれる古い神ですが、ここでは翌朝の再生まで冥界を旅する疲れた老人の姿です。ハラクティは「地平線の」で、そこから復活し、そこから冥界の旅に出るのです^(註6)。

あなたは輝き、輝き出でて昇り、昇る、(4)バヒの丘から。

バヒの丘は日の出の地点。

あなたは天を渡る、良き(5)そよ風で。破壊の海は穏やかになる。

破壊の海は、危険な海の砂州。

あなたは(6)喜悅して空を横切り、夜の聖船は攻撃して来た者を滅ぼした。

邪悪な聖霊は(7)修羅場で倒され、あなたの敵は(8)すべて倒された。

ヌウトはあなたにお辞儀^{ニイニイ}をし、セルキトの(9)両腕は毎日あなたを抱き寄せる。

nynyニイニイを原著者はbeckonと英訳しているが、これは手のひらを上に向け、指だけで「こっちへ来い」という仕草です。nynyは辞書には「挨拶する」とありますが、壁画などでは、両手のひらを相手に向けて、膝の前方まで下げるポーズです。挨拶など、敬意や歓迎の意をこめてお辞儀する動作です。手のひらの向きだけが反対ですが、日本のお辞儀とそっくりです。

ここまで、4つの2行連句(対句)の8行になるが、2と2で4、4と4で8という構成は古代エジプト人の最も好む詩や歌の形式です。アムーンやアトゥムの名を借りていますが、中身はよく知られた太陽神レーへの讃歌で、第18王朝中頃から王以外の個人が神に捧げられるようになった讃歌です。

3

ここから碑文は、プタハモーセの私事^{わたくしごと}になります。多くの例では、太陽神の聖船の一行に加えてほしいとか、古王国以来の究極の願望：供物を供えてほしいとかある中で、プタハモーセの願いはささやかです。

私にあなたが輝き昇るお姿を見せて下されば、

私の心は、あなたに定めていただいた供物で(10)満足しております。

そして、筆者が感心してしまったプタハモーセの言葉：

わが^{バー}靈魂は天に、わが^{むくろ}骸は冥界に、

(11)わが像はト・メリに無事におります。

この2行は、古代エジプト人の死・ミイラ・葬送・墓・魂・復活について、我々3千年後の人間にも、非常に分かりやすく述べています。非常に珍しい表明です。自分の死について、軽く、冗談っぽくさえ聞こえる言い方です。言葉遣いを検討してみると自虐的ときえ言えます。

「靈魂」と訳せる語はいくつかありますが、ここでは「バー」です。『死者の書』の挿絵などでは、首から上だけ本人たちの顔のつがいの鳥になって、下界の家族を見守ったりしています。現代日本でも、親を失った子供に「お母さんは星になったんだよ」「きっと空のどこかから君を見てるよ」と慰めたり、まとわりつく蝶に亡き父を感じたりするのも、我々もバーのようなものをどこかで信じているからでしょう。しかし、プタハモーセは、鳥の姿で家族に会いに来ようという気は、全くないようです。この「わが^{バー}靈魂は天に」は「天のどこにいるのかわからない」というニュアンスが感じられます。どうでもいいとでも言いたげです。

遺体についても全く無関心です。遺体を指す語はこのヒヤエトの他にないようですが、少なくともミイラにはしてもらっているでしょうから、何か言い方がなかったのでしょうか。辞書にはサッフ「ミイラ」という言葉があります。和田浩一郎氏の『古代エジプトの埋葬習慣』には、

「遺体となった肉体は「カト」と呼ばれるが、ミイラ処理された遺体には「サフ」という別の呼称が用意されていた。サフは埋葬のための適切な儀式が施された遺体で、来世での再生のためにカアやバアが宿ることができるのはこのサフ^(注7)だった」

とあります(引用文中のカトは筆者のヒヤエト、サフも同じくサァフ)。ヒヤエトは、「陛下の叛逆者に墓はなく、その死体は川に投げ捨てられる」の「死体」と同じ言葉です。また、一応「冥界」と訳しましたが、ドウワトは「墓の深い奥底」^(注8)とも訳せる語です。

このプタハモーセの石碑は、冒頭の深い信仰心が見られる太陽神讃歌から始まりますが、これは決まり文句の丸写しの可能性もあります。それに続く供物の量について「あなたに定めていただいた供物で満足しております」という謙虚で殊勝な言葉は、あまり類例がないように思います。自分の死後の魂や遺体にさえ無関心な人は、供物の量などまるで意味のない問題なのでしょう。

次の文は、一転して明るい調子です。「わが像」というのは、家族や友人が参拝する言わば墓の応接室に置かれる彫像です。複数作られ、墓の奥底の埋葬室にも棺の側に置かれていたりもします。この像がまだこの世に無事に(または：しっかりと、確固として)立っている(から、安心だ)と言っているようです。

通して、筆者の解釈で意識してみると、「靈魂は鳥の姿でどこかの空を勝手に飛びまわっている、遺体は深い墓の奥底(復活しても出られるわけがない)、だけこの世にはまだ、私に生き写しの彫像が無事に立っている。これで安心して死んでおれる」というわけです。

ト・メリ(ギリシア語：ティムリス)は「豊穡のエジプト」という意味で、倭国を豊葦原の瑞穂の國というような美称です。「この世」は「エジプト」のことです。エジプト人の「この世に再生・復活したい」というのは、「このエジプトで生まれ直したい」という意味なのです。エジプト以外は「この世」ではないのです。『シヌーヘ物語』という文芸作品の主人公が、最後にエジプトで死にたいと願うのも、エジプトで死んで、エジプト式の埋葬をしてもらって、エジプトで復活したい、ということなのです。

プタハモーセはこの世に何の未練もなさそうなのに、なぜこの世＝エジプトをト・メリという美称で呼ぶのでしょうか。なぜ自分の彫像だけを自分の支えにするのでしょうか。

4

ソカルの日、(12)彼はホルスの従者のように、メンフィスの城壁を歩き回れるのです。ソカルは葬祭の神。「彼」は、前文を受けて、「彫像」です。「ホルスの従者」は正しい人の意。

朝からニンニクを首に掛けて、(13)オシーリスのカーのために福者〔として?〕

動詞チェスから見ると「首に結んで」かも知れない。文末は何か欠語があるか混乱があるらしい。「福者」は筆者がイマクウ(祝福された死者について尊ばれる人)の

訳語に使っている語です。古くは王の家臣として長年王家に尽くした人の老後の面倒をみる制度(推定)^(註10)の名残として、特に古王国時代にギーザやサッカーラなどにマスタバを造る資格を持つ者の称号として残ったらしい。ここは文が混乱しているので意味不明。

この数行を虚心に読めば、彫像も祭礼に参加できると言っています。そこには、復活や再生の語はまったくありません。しかし、プタハモーセは再生も復活も興味がないので、ソカルの祭だけは参加したいというのはよく分かりません。彫像を息子が誰かに担がせてメンフィス中を回るのでしょうか。

首に掛ける、または首に結ぶネギ属の野菜をニンニクと訳しましたが、その理由は以下のとおりです。ヒガンバナ科ネギ属には、タマネギ・ネギ・ワケギ・ニラ・ニンニクなどがあるが、知られているエジプト語の単語はヘジュウとイアケトだけ。ヒエログリフには限定符というのがあり、同じ発音の単語でも意味が違くと語尾の限定符が変わる。早い話が漢字の部首で、同じ発音の「寺」という字でも手へん、日へん、人べん等で、持・時・侍など別の字、別の単語になるが、ヒエログリフでも同じしくみがあります。ところが、ヘジュウもイアケトも草かんむりばかり。ただ、古王国時代のヘジュウは、ネギ状の野菜の束を包んだ字が限定符になっている^(註11)。これは供養碑の供物卓でよく見る野菜なので、調べてみると殆どは根元にラッキョウのような膨らみがあるワケギと判り、ヘジュウの意味のひとつがワケギと分かりました。これは、辞書のヘジュウの説明や用法の4項目の内、①の「栽培される野菜で、パンや肉などの付け合せ、また薬味」に相当します。しかし、②「独特の匂い・香りがあり、ソカルの祭で首に付ける」、③「治療薬になる」、更にまた「蛇や悪霊に対する手段」となると、むしろニンニクかと思えます。ワケギとニンニクを同じ語で呼ぶか、という問題もありますが、供養碑の供物の絵からのワケギ説も棄てがたく、今はヘジュウの第1義は「ワケギ(分葱)」、第2義は「ニンニク(大蒜)」としておきましょう。

一方、イアケトはネギかニラか両方かというところ^(註12)です。供物の絵には、ただ多数の平行線だけで書いた野菜の束もまれに見られるので、ネギかニラを描いたものかと思われます。

最後に、プタハモーセの称号(役職)と名前、

財務局の守衛長プタハモーセ、声正し、福者。

破損しているとは言え、石碑や称号から見る限り、プタハモーセは中級程度の公務員だったのでしょう。自分の死後について、こういう常識外れの人は、我々にいろんなことを考えさせてくれます。

古代エジプト人は、本当に自分の魂は不滅で、いつか肉体も復活再生すると信じていた

のでしょうか。

5

冒頭に述べた古・中王国の偽扉/供養碑は、基本的に願文で、古い時期には

- A ナイルの西岸台地のネクロポリスに立派に埋葬されること
- B 先輩の福者たちが歩んだ正しい道を葬列が通って行くこと
- C 基本の供物(パン、ビール、牛、鳥、容器、布)が供えられること

の3点の願文でした。それが、次第にBの正しい道が消え、Aの立派な埋葬が消え、古王国の終わりごろからは、ただただ膨大な供物の要求になります。偽扉や供養碑のメインの彼岸の食事シーンも古い時代は卓の上にスライス・パンが並ぶだけでしたが、中王国以降は、背より高い山盛りの供物になります。

関連して思い出されるのは、上級貴族の大型のマスタバの壁画も何もない多くの部屋です。ガイドは全室、供物の倉庫と言いますが、実際の食べ物が積み上げられていたとは思えません。日本人の「言霊」に似た「絵霊」とも言うべき考え方があり、上記の山盛りの供物の絵がある限り、供物はなくなりません。

古代エジプト人は、本当に復活・再生を信じていたのでしょうか。この墓という「永遠の家」でいつまでも供物で過ごしていく…、のではなかったのでしょうか。偽扉/供養碑の願文は、古い時代は、「ヘテプ・ディ・ネスウト(王の恩恵)」「ヘテプ・ディ・アヌーブ(アヌービスの恩恵)」と、葬儀・埋葬・供養を認可する王と、遺体のミイラ化・葬儀などを司るアヌービスが併記されていました。古王国の後半になる頃、冥界の王オシーリス神も併記されるようになり、その後中王国以降は殆ど王とオシーリスになります。供物願文の最初の「ヘテプ・ディ・ネスウト(王の恩恵)」の4文字は型式的な冒頭句のようになり、願文の宛先はオシーリスでした。その時代が長く続きます。時代や地域によって他の神々もオシーリスに併記されます。ただ、ヘテプ・ディ・ネスウトの4文字は、ローマ時代の供物台にも化石的に残っています。

王族以外のエジプト人にとって、自分(あるいは遺族)がこの世に残せるものは偽扉/供養碑です。石にヒエログリフ(象形文字)で刻んだ文章は、神に読んでもらうものです。人間同士のやり取りは、公務でもプライベートでもすべて筆記体です。偽扉や供養碑を読む筈の神々に、復活・再生の神はいるのでしょうか。アヌービスは葬祭、オシーリスは西方浄土での幸福、つまり冥福を保証する神です。偽扉や供養碑は墓碑銘であると同時に遺書のようなものです。その中に復活・再生の願いは書かれていません。永遠に供物が続くことだけを願っています。死んでいくエジプト人はだれも復活・再生を望んでいません。

新王国第18王朝以降、貴族の墓には狩猟などの遊び、大人数の宴会のシーンが描かれています。これらはあくまで、この世の思い出アルバムです。一方、あの世の野辺で妻と二人で畑を鋤いている絵、これはあくまであの世の情景で、あの世を研究する学問神官が作った想像図です。古王国のピラミッド・テキスト、中王国のコフィン(棺柩)・テキスト、新王国の死者の書等々は、あくまで「あの世学」の専門書^(注13)です。繰り返しますが、偽扉や供養碑は遺書のようなものですが、その中に復活・再生の願いは書かれていません。

(こやま・まさと = 当調査研究センター元職員)

- 注1 HODJASH, Svetlana, and Oleg BERLEV, *The Egyptian Reliefs and Stelae*, Leningrad, 1982, (カタログ番号)71, pp.121(photo),123,126. また、絶対年代は河合望『古代エジプト全史』雄山閣 pp.277-281による。
- 注2 GARDINER, Sir Alan, *Egyptian Grammar*, 3rd edition, revised, London, 1957, pp.170-173
- 注3 『ルーヴル美術館所蔵古代エジプト展図録』2005 p.90
- 注4 注1 文献、nos.52, 53, 55など。
- 注5 GARDINER, Sir Alan, *The Transcription of Egyptian Proper Name*, 注2 文献 pp.434-437所収
- 注6 リチャード・H.ウィルキンソン、内田杉彦訳2004『古代エジプト神々大百科』東洋書林 p.100
- 注7 和田浩一郎2014『古代エジプトの埋葬習慣』ポプラ社 p.37
- 注8 SETHE, Kurt, *Ägyptische Lesestücke*, Hildesheim 1959, S. 69
- 注9 FAULKNER, Raymond O., *A Concise Dictionary of Middle Egyptian*, Oxford 1962, p.310. 古代エジプトでは以前からミイラが復活するという話と、棺が置かれるのは、深いシャフト(以前は豎坑と言っていました。フランス語ではピュイ、井戸です。)の底で、そのあと瓦礫や土砂で埋められるという話が矛盾しているようで、よく理解できませんでした。昔、書名は忘れたが(たしかドラキュラとか…)という新書で、古今東西、死者が蘇って帰ってこないようにする努力がなされた。蘇るとドラキュラとかキョンシーとか、最近メジャーなゾンビとかろくなことにならないということを読んだ。エジプトの瓦礫で埋める深いシャフトも死者の復活を防ぐ方法と今では理解しています。上野誠『万葉学者、墓をしまい母を送る』(講談社文庫 2022)も参考になります。
- 注10 筆者が1970年代にルーヴル校でヒエログリフ・エジプト語を学んでいた頃、講師のJean-Louis de Cenival先生に聞いた“推測”に、後年筆者の“推測”もまじえたもので、根拠となる資料・文献等はない。「福者・福女」はカトリックの用語であるが、「聖人・聖女」と違って日常耳にする日本語ではないので、以前から「イマクウ・イマクウト」の訳語として使っている。
- 注11 ERMAN, Adolf, und Hermann GRAPOW, *Wörterbuch der Aegyptischen Sprache*, III, Berlin 1982, p.212; cf. 同 *Die Belegstellen III*, (手書き頁の)p.68.
- 注12 これはむしろ英語やドイツ語の問題で、ネギとニラをはっきりと訳し分けていないのが原因です。辞書が編纂されていた100年前のロンドンやベルリンの八百屋にどんなヒガンバナ科

ネギ属の野菜がどういう名前で売られていたかが問題です。

注13 筆者は、仏教系の学校に行ったわけでもなく、専門書を読んだり、修行をしたわけでもありません。そんな普通の日本人の筆者は、父を亡くした時、四十九日の間に、寺の住職から法話を何度も聞きました。父の旅、修行、成仏…。死んでからもたいへんなんだ、とは思いましたが、信じることは出来ませんでした。